Economic Indicators

定例経済指標レポート

指標名：国際収支(2011年８月)

発表日2011年10月11日(火)

～貿易収支の赤字転落を受けて、経常収支黒字は縮小～

第一生命経済研究所　経済調査部
担当　エコノミスト　星野　卓也
ＴＥＬ：03-5221-4526

		原数値 経常収支（億円）	貿易・サービス収支			所得収支	季調値 経常収支（億円）	貿易・サービス収支			所得収支
				貿易収支	サービス収支				貿易収支	サービス収支	
10	1月	8819	108	1667	▲ 1559	9159	16182	7969	9134	▲ 1166	9020
	2月	15933	7123	7853	▲ 730	9619	12530	4531	6107	▲ 1575	9137
	3月	25564	10995	10890	105	16676	16600	6766	8557	▲ 1792	10390
	4月	13312	4746	8711	▲ 3964	9862	14680	6233	7781	▲ 1549	9616
	5月	12226	3689	4027	▲ 337	9259	10408	2898	4060	▲ 1162	8386
	6月	10578	6702	7620	▲ 918	4607	13948	5523	6269	▲ 746	9301
	7月	17187	7479	8971	▲ 1493	10558	15593	7403	8152	▲ 749	9126
	8月	11429	937	1706	▲ 768	11450	12309	3943	5045	▲ 1102	9586
	9月	20175	8616	9110	▲ 495	12346	16145	5676	6470	▲ 794	11401
	10月	14949	6463	9036	▲ 2574	9323	15127	4722	6049	▲ 1327	11393
	11月	9554	1904	2562	▲ 658	8264	12695	3217	4772	▲ 1555	10308
	12月	11979	6883	7635	▲ 752	5854	15386	6255	6960	▲ 705	10042
11	1月	5472	▲ 4753	▲ 3994	▲ 758	10931	11787	3598	3924	▲ 326	9272
	2月	17008	6884	7203	▲ 319	11965	12748	3752	4873	▲ 1121	11494
	3月	17386	2675	2368	306	16359	8062	▲ 1517	300	▲ 1817	10108
	4月	4124	▲ 7921	▲ 4120	▲ 3801	12906	5759	▲ 6987	▲ 5556	▲ 1431	13487
	5月	5859	▲ 7906	▲ 7713	▲ 193	14539	3857	▲ 8089	▲ 7025	▲ 1064	12890
	6月	5389	253	1299	▲ 1046	6048	9372	▲ 798	92	▲ 890	11287
	7月	9902	▲ 1829	1233	▲ 3062	12467	7525	▲ 2740	▲ 410	▲ 2329	11129
	8月	4075	▲ 8773	▲ 6947	▲ 1826	13539	6526	▲ 4099	▲ 1992	▲ 2108	11371

（出所）財務省「国際収支状況」

○　８月の経常収支黒字は前年比▲64.3%の4,075億円

８月の経常収支は、4,075億円の黒字と、コンセンサス（4,536億円、レンジ：2,336億円～7,180億円）を下回る結果となった。また、経常黒字は前年比▲64.3%と６ヶ月連続の黒字幅縮小となっている。原油や液化天然ガスの輸入増を背景に、輸入が前年比＋22.4%と拡大したことを背景に、貿易・サービス収支が▲8,773億円の赤字となったことが大きく寄与した。貿易・サービス収支については、2009年１月の▲10,572億円に次ぐ過去２番目の赤字額となっている。

○　季節調整値での経常収支は前月比▲13.3%と黒字幅縮小

季節調整値での経常収支は、6,526億円（７月：7,525億円）と７月から黒字幅が縮小した。内訳をみると、貿易収支は▲1,992億円と７月から赤字幅を拡大している。７月に引き続き、原子力の代替燃料として液化天然ガスなどの需要が高い水準で推移しており、輸入が前月比＋2.3%と増加したことが主因だ。輸出については、海外在庫の積み増しに向けて、輸送用機器の輸出が増加したものの、全体では赤字となった。

サービス収支は▲2,108億円と７月から赤字幅を縮小したものの、赤字幅は依然として大きい。震災後海外から国内への旅行者数が減少し、旅行収支の受取が低迷していること、円高や自粛ムードの緩和を背景に海外旅行需要の回復が進み、旅行支払や航空旅客輸送の支払が増加したことなどが赤字に寄与している。

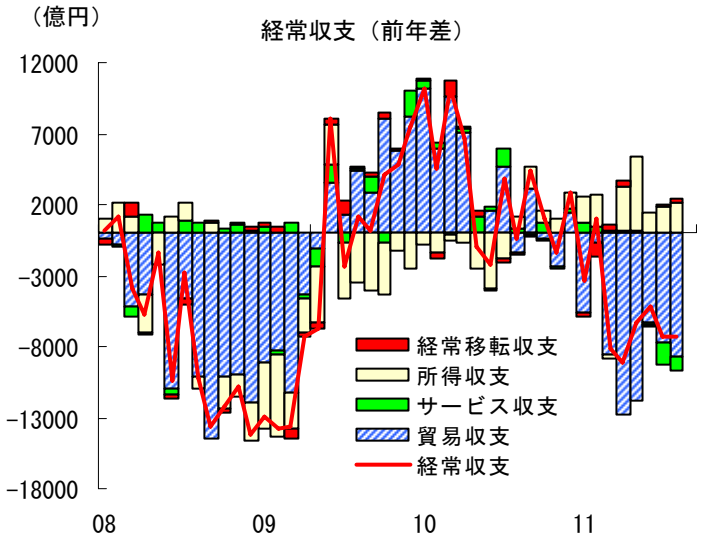
また所得収支は11,371億円（７月：11,129億円）と、７月から若干の黒字幅拡大となった。円高の進行によ

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見通しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

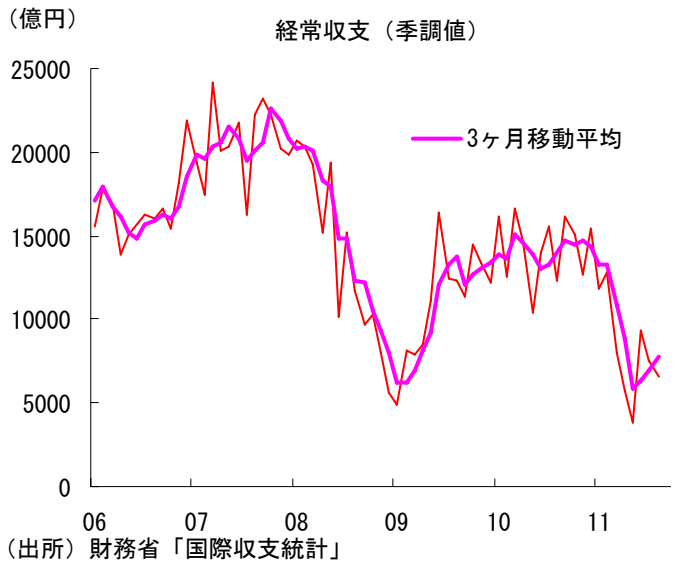
る円建て価額の目減りや、世界景気の減速懸念を反映した米国債券の金利低下が受取額の押し下げ要因となっている模様で、小幅な拡大に留まっている。

○ 経常収支黒字は横ばい圏内での推移となる見込み

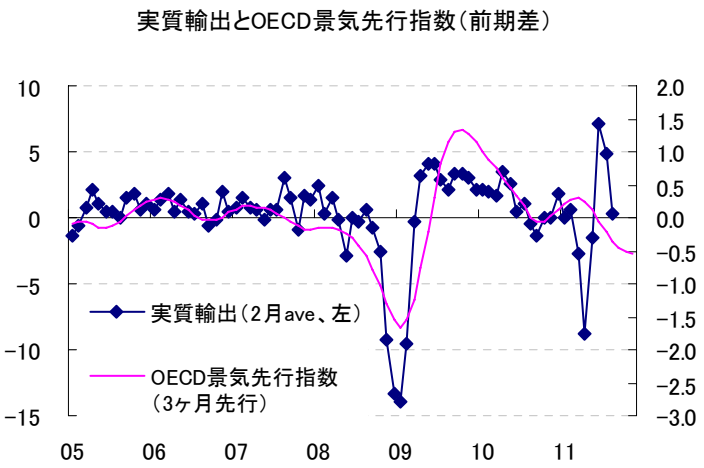
経常収支の先行きについては、海外経済の減速懸念が強まっていること、高い円高水準が今後も続くと見られることから、季節調整値で見た経常収支は横ばい圏内での推移が続くものと見る。個別に見ると、貿易収支については、ＯＥＣＤ景気先行指数の低下が続くなど外需の先行きに不透明感が強まっており、輸出の悪化が懸念される。輸入についても、原子力の代替燃料として液化天然ガス等の需要が、引き続き高水準で推移することが見込まれ、貿易黒字の定着には時間がかかる可能性がある。所得収支については、銀行がM&Ａ融資を拡大する動きを見せているほか、医薬品メーカーなどで大型M&Ａが発表されるなど、円高を好機と捉えた企業による海外直接投資が拡大しており、将来の直接投資収益にプラスとなる見込みだ。しかし短期的には、米国や欧州の景況感悪化を受けた円高や金利の低下が受取額の押し下げ要因となり、所得収支の拡大について高い伸びは期待できない。以上を踏まえると、先行きの経常収支は貿易収支の伸び悩みを主因に、横ばい圏内での動きに留まる公算が大きい。ただし貿易収支の弱さを所得収支が下支える形で、経常収支黒字は維持される見込みだ。



（出所）財務省「国際収支統計」



（出所）財務省「国際収支統計」



（出所）日本銀行「実質輸出入」、OECD

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見通しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。